

迫害の中の教会 / ペトロの救出

十字架につけられたナザレのイエスをメシアと信じるガリラヤ出身の弟子たちの力強い宣教によってできた新しい群れ(教会)が、異邦人さえその中に取り込むような勢いで進展していったことは、ユダヤ当局者たちおよび伝統に固執する熱心なユダヤ教徒たちの敵意と反感をかき立てた。彼らはこの新しい群れの持つ宗教的異端性と政治的危険性を、機会あるたびにヘロデ王に訴え、厳しい取り締まりを要請したと思われる。

ここに出て来るヘロデ王(12:1)とは、あの有名なヘロデ大王の孫にあたるヘロデ・アグリッパ1世である。アグリッパはイドマヤ出身で純粋なユダヤ人ではなく、王になるまでローマで暮らし、ローマ風の教育を受けた人であった。彼の懇意にしていたガイウスが紀元37年にローマ皇帝に即位したとき、彼はピリポとレサニヤの領土を与えられ、39年にはアンティパス(ルカ3:19)の所領を受け継ぎ、さらにクラウディオ帝(紀元41年即位)からユダヤ、ガリラヤの支配権を与えられた。

こうして、ヘロデ・アグリッパはローマ皇帝の権力を背景にしつつユダヤ全土の支配者となった。そして、その地位を維持し確立するために、ユダヤの指導者や民衆の人気を獲得することを懸命に心がけていた。彼の人気取り政策は、ユダヤ当局者たちや民衆のキリスト教会への敵意と反感を見逃しにできなかった。彼は教会弾圧政策を強行し、使徒のひとりヤコブを殺害、それがユダヤ人の意にかなったのを見て、今度は使徒の代表者と見られていたペトロを逮捕し、民衆に対してもっとも効果的と思われる過越の祭の時期をねらってペトロをさらしものにして処刑しようとした。

ペトロは逮捕投獄され厳重な警戒の下に置かれた。こうしてペトロもまたヤコブ同様に、衆愚ののって自己の保身を図るこの為政者の横暴な政策の犠牲になるかのように見えた。しかし、人間的に見ればもっとも絶望的と思える状況の中で、教会ではペトロのために「熱心な祈りが神にささげられていた」(12:5)。

神はその夜、御使いによって奇跡的な方法で介入され、ペトロを救出された。このところのルカの筆致は実にドラマティックであり、またリアルである。御使いによる救出はあまりにも不思議であったため、ペトロ自身にも現実のこととは思われなかった。「幻を見ているのだと思った」(12:9)。

ペトロが御使いの導きのもとに第1、第2の衛兵所を通過して町に抜ける鉄門のところに来ると、それがひとりで開いたので、そこを出て一つの通りを進んだ途端に、御使いはペトロの視界から突然消えた。その時、ペトロは我にかえって事の真相を初めて認識し、心の内で叫んで言った、「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ」(12:11)。

確かに、ある注解者が言うように、ここに出て来る主の御使いを超自然的存在と考えないで、牢獄の内部にいたキリスト教会への同情者とみることも不可能ではない(6:19, 8:26参照)しかし、人間の側でどのように合理的に説明しようと、ペトロ自

身にとっては、この御使いは文字通り超自然的存在であり、この救出の出来事は神の超自然的な介入による救いの出来事であったということを知るべきである。